

内村鑑三のキリスト教 — その現代的意義

はじめに

内村鑑三は一八六一年の生まれで、昨年は生誕百五十周年でした。すでに歴史的人物ですが、近代日本の先駆的キリスト教徒として、また優れた思想家として、明治人にしては広く社会に知られているようです。しかし、その著作は必ずしもよく読まれていたわけではないでしょう。そこでこの際内村の発言を改めて確認してみたいという思いから、きょうの私の話は殆ど彼の言葉の引用ということになります。しかもその引用の仕方は甚だ恣意的であり、引用者は内村研究者でも伝道師でもない、ただ内村に傾倒し彼を敬愛して、そのキリスト教に習って生きてきた一平信徒キリスト者にすぎないことを、予めご諒承願います。その当否は皆様のご判断に委ね、後刻質疑ご批判をいただくたいと存じます。

内村が四八歳の年、札幌農学校時代の同室の友宮部金吾に宛てた手紙の中に次の言葉があります。

小生は君と同室の時と少しも変わらず、毎日の勉学に御座候。是れのみは何よりの幸福

に御座候。

What is Christianity?

Is it worth having?

是れが矢張り最大問題に御座候。……
先づ毎日コンナ事に独り頭を悩まし居り候。君の専門とは違ふなれども、時には真理の発見に由り、飛立つ程嬉しき事も有之候。(’08日6—208) 注1

当時既に名実ともに第一線のキリスト教伝道者であった彼が、若い時と少しも変わらずこの最も根本的な問題に、そのみに集中して生きているという事実に、もう半世紀余の昔感嘆、感激したのが、私を決定的に内村の徒とした一つの契機でありました。このようにして、内村は生涯一貫して「キリスト教とは何ぞや。それは信ずるの価値ありや」を追求したのでした。そしてその結実をいくつかの造語をもつて説明しようとしています。「十字架教、独立的キリスト教、二元論のキリスト教、日本的キリスト教、男性的キリスト教、教会なきキリスト教、無教会主義のキリスト教」など。きょうはその中の二つを採りあげ、それを軸として、彼のキリスト教の実質を少しく解明し、出来ればその現代的意義をも考えてみたいと思っております。その前に、内村のキリスト教理解を最も端的

かつ根元的に表白していると思われる短文を紹介しておきます。

キリスト教は制度ではない。教会ではない。それはまた信仰個条ではない。教義ではない。神学ではない。それはまた書物ではない。聖書ではない。キリストのことばでもない。キリスト教は人である。生きた人である。きのうも、きょうも、永遠（いつまでも）も変わらざる主イエス・キリストである。

（キリスト教は何であるか、14、信 15—52）
「キリストは今なお生きて、われらと共にいましたもう」。キリスト教の極致はこれなり。
（キリスト教の極致、08、信 8—242）

無教会主義のキリスト教

内村は一般に「教會的キリスト教に対して無教会キリスト教を唱えた」（広辞苑）と言われている。その通りですが、もう少し正確に言えば、まず「無教会キリスト教」などというキリスト教はないと言わなければならない。彼はただ自分が四十年にわたって信じ、かつ宣べ伝えてきた「この形なき形のキリスト教を、よ・り・よ・い・名・称・が・な・い・の・で」無教会主義のキリスト教』（Christianity of no-church principle）と呼ぶ」（英文、霊と形、²⁷、英³⁶⁵）注²と言つて

いるまでです。これに続けて「しかし實質には名稱以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である」と主張しているが、この「よりよい名稱がないので」という言い様には、内村の謙虚と自負とユーモアがよく表れていて、私にはこれが「無教会主義のキリスト教」に対する最善の定義だと思われず。内村に体系的な無教会論、まして無教会神学はありませんし、著作中の「無教会」という語の使用頻度も人が思うほど多くはありません。

それでは「無教会主義」とは何か。代表的と思われる一文を読んでみましょう。

無教会主義とは、教会は有つてはならぬといふことではない。有るも可なり無きも可なりといふことである。神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取つて現われ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。生命はヘブライ語で言うルー・アクである。風である。息である。「風はおのがまに吹く。なんじ、その声を聞けども、いずこより来たり、いずこへ行くを知らず。すべて靈に吹く所（ヨハネ）とあるそれである。この風の吹く所に、生命がある。そして生まるる者」

機会としての儀式は、これを重んじ、これを励行する。

(教義と儀式、¹⁶・信14 | 186)

余はこの両式(洗礼・晩餐)を蔑視(べつし)する者にあらず。否、かえって余はこれに對して非常の尊敬を表する者なり。洗礼は、キリスト御自身がバプテスマのヨハネより授かりたまひし式として、晩餐は、キリスト受難の記念として、余はその非常にうるわしき式なることを知る。ゆえに、余はこれをもつて救霊上の必要とは見なすことあたわざるも、これを受けて、われらの信仰養成上、少なからざる利益あるを疑わす。

されども、もし人ありて、水の洗礼を受けず、余は救われざるべしと言ふ者あれば、余は余の聖書に従つて余の精神的自由を唱え、かくのごとき説に服従せざらんとす。われらは信仰によりて救はるるにあらざるに儀式的によりて救はるるにあらざる。これにあらずかるはよし。あざからざるもよし。要は、十字架につけられし神の子の贖罪(しよくざい)を信ずるにあり。その他

の事は細事のみ。(洗礼・晩餐廢止論、¹⁰¹・信14 | 201)

さらに聖職制度については、こう言っています。

す。

+ 差別の撤廢の場合において往々見るがごとき、貴族が下落し平民となる事であつてはならない。平民が向上してすべて貴族となる事ではなくてはならぬ。聖が俗化する事ではない。俗が聖化する事である。人生そのものが伝道事業となる事である。聖職と稱して、神に仕うるための特別の階級が撤廢せられて、すべての職業が聖職となる事である。われらはこの理想に向かつて進むのである。

(聖俗差別の撤廢、¹²⁸・注7 | 179)

これは、いわゆる「万人祭司」の主張であると言つていいでしょう。

「教會有るも可なり、無きも可なり」「洗礼・聖餐あずかるもよし、あざからざるもよし」と言うのは、いかにもあいまいで、どっちつかずの言辞に聞こえるかもしれません。しかし、實は決してそうではありません。有と無、あるとないとは全く反対で、いずれを取るかは嚴しい信仰的決断を迫るものであります。無教會主義は、イエスのトマスへの言葉で言えば、「見たから信じるのではなく、見ないのに信じる」(二九)。既出の内村の英文論稿「靈と形」において用いられている表現で要約的に言えば、

問題はどうでもよきように思われる。これに「無教会主義の積極的半面」ということを考えさせらる。全人類を教会と見るのが本当の見方ではあるまいか。選民と非選民と、信者と不信者と区別するのが間違いではあるまいか。全人類を教会と見間違いではあるまいか。全人類を教会と見、キリストをその首長として仰ぐならば、自分もその会員たることを辞さない。無教会主義の積極的半面は全人類教会主義であらねばならぬ。(29 日4 | 352)

この「一人一教会主義」と「全人類教会主義」を合わせたものが、内村の教会観の総括であると言つてよいように思ひます。この内村が、「無教会」などといった一(宗)派をなすことなど考へもしなかつたであります。

「無教会主義」は何よりもまず人の生き方に「無教会的生き方」はいかなるものか、そのほんの一端を内村自身に語つてもらおうと思ひます。

肉の事については普通の人のたれ。霊の事については特別の人たれ。世が見ては普通の農夫たれ。普通の職工たれ。普通の商人たれ。しかり、やむを得ざる場合において普通の官吏たるも可なり。されども神の

眼より見ては、この世の属(もの)たるなかれ。籍を天国に置く聖徒たれ。キリストと共に歩む神の子たれ。外は他の人と異なるらんと欲するなかれ。ただ内に神の光を宿して、暗き世にありてその暗黒(くらき)を照らすべし。ナザレのイエスに鑑(かん)が(み)よ。彼は身は木匠(だいく)にまし(内と外、'09 信8 | 42)

この「やむを得ざる場合においては普通の官吏たるも可なり」などは、いかにも内村らしい、現代にも通ずるアイロニカル・ユーモアではありませんか。預言者的と評され、その厳しい内村はしばしば預言者的と評され、その厳しい面の撤廃は次のようだが、「聖職」を生みます。差別の撤廃は次のようだが、「聖職」を生みます。

祭司、世に貴むべき職にしてこれにまさるものはない。これまことに聖職である。唯一の聖職である。神を人に紹介し、人を神につれ行くの職、これまことに慕うべく懇求(もと)むべき職である。地位にありて、善き祭司となることができ。心、何たるかを知り、その愛であつて、心の何たるかを知り、その愛であつて、恐怖でないことを知り、その愛であつて、子をさえ惜しまずして与えたもうほどに、

人を愛したもうを知り、同時に、また自己（おのれ）を知り、おのが罪を知り、これを除くの道を知り、悲痛（かなしみ）を知り、艱難（なやみ）を知り、これによりて同情を知り、慰籍の術を知り、平和獲得の秘訣（ひけつ）を知りて、われら何びとも、神と人との間に立ちて、神を人に紹介し、人を神に導きて、祭司の聖職を果たすことが出来る。これまことに人として最もふさわしき職（わざ）である。（祭司とは何ぞ、

¹¹ 信 14・136)

あることは申すまでもありません。彼は言いま

す。内村のキリスト教が「聖書のキリスト教」で
過言なるべし。されども聖書を離れてキリ
スト教なきは否むべからざる事実なり。聖
書の研究は必ずしも人をキリスト信者とな
さざるべし。されども聖書を学ばずしてキ
リスト信者となり得べからざる必要経路
なり。これに宗派の異同あるべからず。こ
れに信、不信の差別あるべからず。吾人は
伝道の最良手段として、また世界知識最善
の注入策として、教会を離れたる聖書研究
会の設立を促す者なり。最も確実なる信仰
はこれより起こらん。キリスト教に対する

思慮なき反対はこれによつて絶つを得ん。
公平なる聖書の研究は、有益なる公的業
の一なり。吾人は単にこれを教勢拡張の用
に供して、その伸張を阻（はば）むべから
ざるなり。（聖書研究会の設立を促す、¹⁰⁴ 信 7—04）

ず。また感情的探究にあらざり、
常識をもつてする、深き静かなる研究なり。
（かんが）み、宇宙と人生とを支配する神
の聖意の探究なり。聖書の研究はすべての
研究の中に最も広くして最も深き研究なり。
実在の中心に達せんとすることなり。愛を
もつて万有を解せんとすることなり。¹⁰⁶ 信 7—107）

聖書これら文章には、現代における原理主義的
今日驚異的な発達を見せ、聖書学の成果を、
私ども平信徒がいかにこれを受け容れ、かつ利
用すべきかについて、示唆するところ大きい
ものがあると思ひます。私はこのように聖書を
紹介して、なぐらるる聖書の先生をほかに知りませ
き 燈火親しむべき秋が来て、第一に読むべ
き書は聖書である。聖書を読んで、永久の

利益がない。彼の心に永久の春がある。聖書を
読んでも、理想が尽きない。詩と歌と音楽と
は、その必然の結果として、わが口より流
れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙
と人生とについて深く知らんと欲する
欲求がわいて尽きない。もし世に神の言が
あるならば聖書を措（お）いてほかにある
とは思えない。人類の所有のうちで最も貴
いものは書籍であつて、書籍のうちで最も
貴いものは聖書である。（秋と聖書、²⁷信11—234）

この項の最後に、無教会主義のキリスト教の
伝道観と言える文章を挙げることにします。

日本国のごとき不信国においては、キリ
スト教信仰を維持する事だけが、伝道的に
見て一大事業である。彼つに教会を起す
に及ばない。多数の信者を作るに及ばない。
宗教的大著述をなすに及ばない。一たび受
けし信仰を勇敢に頑強（がんばり）に守
り通す事だけが、大なる伝道事業である。日
本国において純福音を信じ通す事は至難の
業である。その事は、一たび信仰に入りし
者に於て、千人はわれらの左に倒れ、万人
はわれらの右に倒れ（詩篇九一・七）しに
よつて、外來の援助にたよることなくしてキ
リ

リスト教の信仰を守り通す事は至難の業（
わが）である。そうしてこの事をなし得て
われらは大事をなし得しことについて神に
感謝すべきである。あるいは三十年、ある
いは四十年、あるいは五十年、この社会の
冷笑、嘲笑（ちやうしやう）、反対の中に
わが信仰を維持することを得て、われは善
き伝道をなすべく許されたのである。あえ
て他に伝道事業を企つるの必要はない。内
に對しては明白に、外に對しては独立に、
一生信仰を守り通して、われらはそれだけ
にて善き伝道師たり得たのである。（²¹信17—133）

何とも慰めと励ましに満ちた文章ではありま
せんか。

日本的キリスト教

内村は紆余曲折を経て四十歳の時（一九〇〇
年）に、彼の天職と言ふべき『聖書之研究』
誌を創刊、以降専心聖書の研究とキリスト教の
伝道に従事し、七十歳で東京に没するまで変
ることはありませんでした。「柏木の隱者」と
まで評されたという、その生活を内村の社会
性の後退と見る向きもありますが、その間彼は
決して超俗のそれを送ったわけではありませ
ん。キリスト者として、世界人（後出）として、

そして日本人として、常に時代の見張りを怠らず、社会の木鐸として折々に適切な発言を続けたのでした。彼が今なお近代日本の思想家の一人に数えられるゆえんでありましょう。この内村の生き方を語るものが、内村のもう一つの主張である「日本のキリスト教」です。私は、これと「無教会主義のキリスト教」とは一对をなしていると考えています。

キリスト教は世界的宗教であるのに何ゆえの日本的キリスト教か、という批判に答えて内村は言います（英文）。

ひ・と・り・の・日・本・人・が・真・に・独・立・に・キ・リ・ス・ト・を・信・じ・る・と・き・彼・は・日・本・的・キ・リ・ス・ト・教・で・あ・り・彼・の・キ・リ・ス・ト・教・は・日・本・的・キ・リ・ス・ト・教・で・あ・る・こ・と・は・ま・つ・た・く・単・純・で・あ・る・日・本・人・ク・リ・ス・チ・ヤ・ン・は・全・キ・リ・ス・ト・教・を・私・す・る・わ・け・で・は・な・い・し・ク・リ・ス・チ・ヤ・ン・に・な・る・こ・と・に・よ・つ・て・新・し・い・キ・リ・ス・ト・教・を・つ・く・る・わ・け・で・も・な・い・。・彼・は・日・本・人・で・あ・り・、・か・つ・ク・リ・ス・チ・ヤ・ン・で・あ・る・。・そ・れ・ゆ・え・、・彼・は・日・本・人・ク・リ・ス・チ・ヤ・ン・に・あ・る・。・日・本・人・が・ク・リ・ス・チ・ヤ・ン・に・な・る・こ・と・に・よ・つ・て・、・ま・す・ま・す・日・本・人・ら・し・く・な・る・。・

同じ趣旨のことを彼は有名な「二つのJ」という短文（これも英語）でも語っています。

わたしは二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス、一つは日本である。

わたしは、イエスと日本の、どちらをより愛するか知らない。日本の、どちらを人に憎まれ、日本のため外国の宣教師に国民的であり視野が狭いと嫌われる。人を失っても、イエスと日本を失うことはできない。

イエスのため、わたしは「彼の父」以外のいかなる神をもわが神、わが父と認め、外国人の名にできない。また日本のため、も受け容れることはできない。イエスと日本、わたしは二つの中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である。わたしは二つの中心は、この二つの親しい名前のまわりを回転する。そして一方が他方を強めることを知る。イエスは日本に對するわたしを愛を強め清める。日本は、イエスに對するわたしの愛を明確にし目標を与える。この両者がなかつたならば、わたしは単なる夢想家となり、狂信者となり、漠然たる一般人となつたことであろう。

イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。わたしはこの両者を同時に愛することによって、狭くなりすぎることもなく、広くなりすぎることもないのである。(二つのJ・英³¹)注⁴

「わたしは、イエスと日本の、どちらをよ
り愛するか知らない」と聞いて、「敬虔な」
クリスチャンは激昂するかも知れません。――
多分この一文を聞いて仰天し、その先を読まな
いからだと思えます。いま私が引いた所まで
よく読めば、内村の言っていることは実に真つ
当な主張だと思ふのですが――結局内村はい
わゆるナシヨナリスト、いや皇国主義者では
ないか。事実「新しい教科書をつくる会」の
教科書にはそう言われかねない「内村鑑三」が
紹介されているやに聞きます。それを「実証」
するかのようで恐縮ですが、ごく晩年の日記
の一節には、こんなことも書きつけられてい
ます。

この日また、ある事よりして、日本を
わが愛人として愛するの幸福に気付いた。
これは青年時代においてわが心を燃やし
た愛であるが、老年に至ってこれを復活
するの必要を感じず。日本とは、日本政

府でもなければ日本人全体でもない。日
本という、ある Mysterious personality であ
る。これを愛し、これに仕えて、われは
無上の幸福を感じるのである。(27・9・
4の日記、日4―91)

「日本という、ある Mysterious personality
神秘的な人格」とは異様な言い方です。私
はすぐローマ書九く十一章のパウロの「イスラ
エル救済史論」を連想したのですが、これを
正當に理解して説明する力も用意ありません。
いずれにしても内村のこの「日本愛」(聞
きなれない語を使いますが)が、今日もてはや
されている偏狭で隠微なナシヨナリズムとは
全く似て非なるものであることは言うまでもあ
りません。
「世界と日本」という英文の一篇があります
が、そこで彼は言っています。

世界の日本である、日本の世界ではない。
日本は世界のためである、世界は日本のた
めではない。
世界の連帯性がますます増大しつつある
現代において、他のすべての国々を犠牲と
して一国を大きくしようとの考えは愚の骨
頂である。
他に仕えることは束縛である。他に仕

先に私は、内村の無教会主義のキリスト教と日本のキリスト教とは対をなしている、と申しました。この点をそれぞれに別の角度から示している二つの文章をご紹介します。一つは「預言研究の必要」という講義の冒頭に置かれた次の短文です。

信仰は内でありまた外である。目に見ゆる外なる物の証明にあわせて、目に見えざる内なる霊の承認ありて、確乎動かざる信仰があるのである。信仰が内に限られて神秘化し、夢のごときものとなりて消えやすくある。また外に限られて浅薄になり、政治、経済と類を同じゅうし、この世の勢力と化するのとおそれがある。信仰もまた健全なる身体のごとくに二本の足に立たねばならぬ。外なる歴史と天然と、内なる確信と道義の上に立たねばならぬ。(30 注 6—7)

もう一つは、有名な『ロマ書の研究』の「第五六講 約説」の中の次の文章です。

キリストは神人 God-Man であつた。神と人との両性を一体において持つ者であつた。信者もまたそうである。信者はこの世を全

然超越したる、いわゆる聖人ではない。彼に神らしきところがある。同時にまた彼は人らしきところを失わない。彼の最大の心がかかりはもろろん天につける事である。されども彼は地につける事を忘れない。クリスチャンは intensely divine (深刻に神らしく) たらんと欲すると同時にまた intensely human (深刻に人らしく) である。天に關し最大の興味をいだくに至りし彼は、地に關し最も熱心なる者である。ヒューマニテイは、地と人とに關する熱心である。これを人間味と訳すべきであると思う。Divinity と Humanity 神にかかわる事と人にかかわる事、神学と文学、完全なる人に必ずこの両方面がある。(22 注 7—213)

既に「二つのJ」の中に「イエスと日本、わたしの信仰は一つの中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である」とありました。ここに、信仰の「内と外」があり、クリスチャンの「深刻に神らしくと深刻に人らしく」があり、「神にかかわる事と人にかかわる事」があります。その他、内村の文章の中に楕円の二中心を探れば優に十指に余ります。そして晩年には「楕円形の話」(30 信 22、140) という滋味豊かな講話までありますが、きょうの私の話で言えば、内村の「天に關し最大の興味」が「無教会主義のキリスト教」を生み、

彼の「地と人に関する熱心」が「日本のキリスト教」と成ったのであります。実にこの「楯円の思想」「真理の楯円の把握」こそ内村のキリスト教、その信仰と思想の中核をなすものと言つてよいと思ひます。

鈴木範久氏は、このような内村を「一種の相対的な真理観」の持ち主であつたとし、その思想法を「複眼的思考法」ともいえるのではないかと言つておられますが、^{注6}慧眼だと思ひます。私は更にこれを「相対化の視座」とでも呼んでみたいと考えます。「日本」その民族、国家、社会、文化、心性を相対化する厳しい批判精神と、誤解を恐れずに言えば「イエス」をも相対化する強靱な靈性、その二つの中心を等しく愛するゆえの弁証法的緊張と深刻な内的葛藤に耐える、硬質で余裕（内村の「ユーモア」の訳語）ある信仰こそ、内村のキリスト教と言ふべきでしょう。

今回は一切割愛しなければなりません、一言申し添えれば——この内村のキリスト教から、彼の「非戦論」（平和主義）や「平民論」（民主主義）が生まれたこと、また彼のキリスト教が、今なお日本（人）のキリスト教受容における一つの重要な試金石であり続けていること（「接ぎ木の理」（²⁶信11・²³⁰）参照）、更に彼のキリスト教には、広く宗教のもつ原理的課題と言ふべき「信仰と文化」の問題に対する極めて明晰な洞察さえもが窺える、と私は考

えております。同時に、当然のことですが、内村の所論に時代遅れと称すべきものもあるといふことは、はつきり申しあげておかねばなりません。

おわりに

「その現代的意義」などと大げさな題を掲げてしまひ失礼しました。私に現代を分析する能力はありません。ただ一つ言えることは、世界的に見て現代はいかにも「宗教過剰」の時代だといふことです。エキュメニズムや宗教間対話が喧伝されながらも、宗教対立は激化の一途をたどり、「信仰」の傲りはとどまるところを知りません。信仰の熱狂（フアナテイズム）が戦争と暴虐を惹き起し、宗教の陶醉（エクスタシ）がテロと自爆死を生み出しています。

このような時代に、どこまでも靈性に徹しようとする「無宗教無教会」の内村のキリスト教を改めて省察してみることも意義があるうかと考え、きょうの話を書いたしました。この表題の一文を読みます。

私のキリスト教は宗教でない。私の集會は教会でない。そう聞いて、多くの人はふしぎに思うであらうが、決してふしぎでない。イエスの教えは決して宗教でなかつた。彼がパリサイの徒と戦いたまひしは、宗教

と戦いたもうたのである。天の父が完全（
 まった）きがごとくに完全からんとするが
 イエスの教えであつて、それはこの世のい
 わゆる宗教とは全然質を異にするものであ
 った。イエスの教えがキリスト教という宗
 教となり、彼の弟子（でし）が教会という宗
 教的団体を作りし時に、ここに彼の予期
 したまわざりしものが現われて、彼のご精
 神は全然没却せられたのである。その証拠
 には、後世イエスのご精神を深く汲（く）
 みし者はたいては教会の外に立ち、イエス
 のごとくに教会にきらわれて、彼のそしり
 を身に負いて、門の外に苦しみを受けた（
 ヘブル書一三・一二―一三）。ミルトン、
 トルストイ、キルケゴードのごときがその
 善き代表者である。彼らほど信仰の篤（あ
 つ）い人はなかつた。しかも彼らほど教会
 をきらい、また教会にきらわれた人はなか
 った。そして小なる私もまたこれらの信仰
 の勇者と歩みを共にせんと欲するのである。
 私もまたどうぞ金欄（きんらん）の法衣を
 身に着けるような人を管長とも監督とも呼
 びたくない。彼らと席を共にして金杯銀杯
 の下賜にあずかりたくない。ナザレの大工
 そのままの生涯を送り、政治家ピラトや監
 督カヤパに、神をけがす者として、ある種
 の十字架につけられて、一生を終わりに
 欲（おも）う。（²⁹・信 18―128）

内村の没した昭和初期は、金融恐慌、治安維
 持法、軍国主義の抬頭ありで、時代は閉塞的で
 絶望的な状況にありました。現代もまたそつく
 り同じです。にもかかわらず、内村は英文で「
 一楽観主義者の告白」という一文を綴り、「善
 い意志が宇宙を造つたのであるから、その終り
 は完成でなければならぬ」という終末的宇宙
 観を展開して、次のように結びました。

「はじめに神は天と地とを創造された」。
 「呪わるべきものは、もはや何ひとつない。
 夜も、もはやない。神が人の目から涙を全
 くぬぐいとつてくださる」（黙示録二二章
 三、五節、二一章四節）。この始まりとこ
 の終わりの間に、わたしは、自然と人間の
 全歴史を読みたい。一言でいえば、わたし
 は、わたし宇宙観においてひとり楽観主義者
 である。しかり、ひとりの度し難き楽観主義
 者である！（²⁹・英 291）^{注 7}

I am an optimist, yea an incorrigible optimist !
 この内村の告白をもつて話を終わります。
 ご静聴有難うございました。

注 1 引用はすべて教文館版『内村鑑三聖書注解

(注)、信仰著作(信)、日記書簡(日)全集』による。日6-208は『日記書簡全集』6巻208ページ。その前の8は著作年。以下同じ。

2 和文は『内村鑑三英文論説翻訳篇下』(岩波書店)道家弘一郎訳による。英³⁶⁵はページ。英語本文(教文館版『英文著作全集』による)は注として()に掲載する。

For lack of better name, I call this formless form of Christianity, *mukyokai-shugi-no-Kirisutokyo*, Christianity of no-church principle. But there is more in the substance than in the name. It is not a negative faith, but positive,

33 When a Japanese truly and independently believes in Christ, he is a Japanese Christian, and his Christianity is Japanese Christianity. It is all very simple. A Japanese Christian does not arrogate the whole Christianity to himself; neither does he create a new Christianity by becoming a Christian. He is a Japanese, and he is a Christian; therefore he is a Japanese Christian. A Japanese by becoming a Christian does not cease to be a Japanese. On the contrary, he becomes more Japanese by becoming a Christian.

4 TWO J'S
I love two J's and no third; One is Jesus, and the other is Japan.

I do not know which I love more, Jesus or Japan.

I am hated by my countrymen for Jesus' sake as yaso, and I am disliked by foreign missionaries for Japan's sake as national and narrow.

No matter; I may lose all my friends, but I cannot lose Jesus and Japan.

For Jesus' sake, I cannot own any other God than His Father as my God and Father; and *for Japan's sake*, I cannot accept any faith which comes in the name of foreigners.

Jesus and Japan; my faith is not a circle with one centre; it is an ellipse with two centres. My heart and mind revolve around the two dear names. And I know that one strengthens the other; Jesus strengthens and purifies my love for Japan; and Japan clarifies and objectivises my love for Jesus. Were it not for the two, I would become a mere dreamer, a fanatic, an amorphous universal man.

Jesus makes me a world-man, a friend of humanity; Japan makes me a lover of my country, and through it binds me firmly to the terrestrial globe. I am neither too narrow nor too broad by loving the two at the same time.

42 THE WORLD AND JAPAN

The world's Japan; not Japan's world. Japan for the world; not the world for Japan. In this age of the growing solidarity of the world, the idea of making one country great at the expense of all other countries is the height of absurdity.

To serve others is freedom; to be served by others is bond

age.

6 鈴木範久『内村鑑三日録12』（教文館 66）

四四七〜八ページ

7 "In the beginning, God created the heaven and the earth."

"There shall be no more curse: there shall be no night there;

God shall wipe away all tears from their eyes." Between this beginning and the end, I like to read all history; both natural and human. In a word, I like to be a Christian in my view of the universe. I am an optimist, yea an incorrigible optimist!

（所載）『福音の前進と無教会』

講演会記録集』

二〇一二年

駒込キリスト聖書集会